

## 日本消化器外科学会雑誌編集後記

伝統ある日本消化器外科学会雑誌の編集委員にご指名いただき、緊張とともに編集会議に出席させていただいている。そして、最近、心を込めた論文を扱わせてもらえることは何とも尊い仕事であると改めて感じている。

私の勤めるがん専門病院には全国から優秀という肩書とともに明るい将来を嘱望された医師 6-15 年目くらいの外科医たちが 2-3 年間の研修を受けに来ている。外科手術のテクニックのみではなく、臨床研究を中心とした物の考え方や論文・抄録の書き方なども研修内容に含まれており、われわれスタッフはそれらの指導も大切な仕事となる。それほど立派な若者たちにいざ論文を書かせてみると、背景・目的・方法・結果・考察・結論といった中学校で習うはずの科学論文の書き方が全くできていない人が多い。例えば、背景に考察が混じりこんでしまったり、考察では自分の結果を論ぜず引用文献の考察に迷入してしまったりといった間違いを平気で犯す。そんなときは、ため息をぐっと飲み込んで、まずは中学生レベルの科学論文の書き方から教える。「あー、こんなことまで教えなければいけないとはなあ・・・」と思いつつも懇切丁寧に教えることとしている。

実はこれには理由がある。当時、私が医師として 2 年半のときにドイツのウルム大学外科に短期の留学をしていた。そこで、私は幸いにも英語論文を書く機会に恵まれたが、論文の書き方も、英語の文章を書くことすら全く初心者であり、困り果てて茫然としていた。すると、私のラボ仲間であったルーマニアの外科医、カタリンが「直樹、お前の研究は何が題材なんだ。エンドトキシンだろう。Endotoxin と書けないか？」と紙と鉛筆を差し出した。渋々、バカにしているのか？と思いつつもその紙に Endotoxin とひとつのワードを書いた。次に、「だれのエンドトキシンを測ったのだ？」と言われ、その一行を書いた。毎日それを繰り返す、ひとつのワードは 1 行となり、それがやがて 20 ページほどの文章となり、1 か月ほどで論文の体裁をなしていた。その後、帰国してからもドイツとの書簡の往復をし、何度も何度も校正を繰り返す、その論文は Journal of Trauma 誌にアクセプトされるに至った。

なんとも嬉しかったが、それ以上にカタリンの指導者として尊敬すべき我慢に敬服した。論文を紡ぐことの楽しさを教えてもらったことにより、それ以後、論文を書いたり、後輩に書き方を指導することが苦痛ではなくなった。

現在、公の職務であり編集委員として論文をいい方向に導く仕事をさせていただくようになり、改めてカタリンの気持ちを強く思うようになった。

(比企 直樹)

2014 年 6 月 1 日